日本独文学会東海支部冬季研究発表会
愛知大学車道校舎、12 月 1 日（土）14 時

シンポジウム：1890 年－1930 年のドイツ語圏の文化・芸術の解体と融合
Die Auflosung der Normen in der Kunst und ihre Synthetisierung zur Jahrhundertwende

産業化の進行する 19 世紀、ヨーロッパ社会は大きく変動した。台頭する市民階級が、ビーダーマイヤーに代表されるような、自らの文化を享受する一方で、農村から都市への人口の流入は膨大な貧困層を生み出した。近代的な国家体制が確立されていき、自由主義的な改革が進行する一方で、19 世紀末には社会主義労働運動、民族主義、反ユダヤ主義、シオニズムなど様々な動きが絡み合い、社会は複雑な様相を呈していた。

こうした社会の大きな変動に呼応するように、19 世紀末には文化・芸術の分野でも様々な変革運動が起こった。本シンポジウムは、こうした 19 世紀末から 20 世紀初頭の文化・芸術運動を「解体と融合」というキーワードから検証しようというものである。

造形芸術を例にとれば、印象派によるアカデミズム絵画への異議、キュビズムによるルネサンス以来の遠近法の否定、デュシャンの作品の提示する、芸術家の創作行為あるいは芸術作品そのものへの根本的な問いかけ。従来の規範を解体し、新たな絵画を生み出そうとする試みが続けられる一方で、バレー・リュスのように、従来の芸術のジャンルを超えて融合し、新たな芸術を創り出そうという動きもあった。

本シンポジウムの参加者 4 名は、こうした文化・芸術の変革運動を、それぞれ以下のような観点から考察し、当時の文化・芸術の全体像を明らかにしたいと考えている。

①古田香織：雑誌“Die Jugend”のメディア性・芸術性“Die Jugend” ― ihre Funktion als Medium und Kunst

19 世紀末、ミュンヘン分離派の結成などとともに、芸術運動の中心地のひとつとなったミュンヘンでは、1896 年に刊行された大衆雑誌“Die Jugend”が評判となっていた。この雑誌には、イラストがふんだんに使われ、単なる情報メディア（商業主義）としての性格の他に、その当時の芸術運動に敏感に反応した側面（芸術との融合）が見られる。社会情勢や芸術運動との関連性という点からこの雑誌のメディア性、芸術性などについて考えてみたい。

②西川智之：第 14 回ウィーン分離派展 Die vierzehnte Ausstellung der Wiener Secession

1902 年ウィーン分離派は、マックス・クリンガーのベートーヴェン像を中心とした展覧会を開催する。オープニング・セレモニーで、自らが管楽器用に編曲したベートーヴェンの第９交響曲第 4 楽章をマーラーが指揮したこの展覧会は、まさに絵画、彫刻、建築、

デザインそして音楽が融合した一つの芸術作品であった。この展覧会を通して、ウィーン分離派が目指した芸術とはどんなものだったのかを探りたい。

③山口庸子：コンセプトとしての〈筆跡画〉―エルゼ・ラスカー＝シューラーにおける身体、画像、文字 Das Konzept des "Handschriftsbildes": Körper, Bild und Schrift bei Else Lasker-Schüler

一般には詩人として知られるエルゼ・ラスカー＝シューラーは、挿絵や表紙画を手がけるなど、画家としての一面も持つ。書籍や文字のメディア性を強く意識していた彼女は、文字を絵に見立てて装飾したり、絵を小説に取り込むなど、様々なメディア横断的な実験を行っている。その際、感覚や身体性も大きな問題となっている。画家のフランツ・マルクとの交流も視野に入れながら、文字メディアとしての文学における解体と融合の試みを探りたい。

④藤井たぎる：シェーンベルクのマトリックス Schönbergs Matrix

シェーンベルクは一般的に考えられているような意味で「調性」を＜解体＞したわけではなかった。「無調」は彼にとっても、いわば映画『マトリックス』の登場人物モーフィアスの言う「現実界の砂漠」だったのである。音楽を生み出す「マトリックス＝母胎」として、「調性」システムはすでに機能不全に陥っていると考えるシェーンベルクには、多声（ポリフォニー）と和声（ホモフォニー）の＜融合＞をもたらす「12 音技法」という新たな「マトリックス」がなんとしても必要だった。シェーンベルクの創作の過程をとおして、彼の思想の射程を探ることにしたい。